

Title	古代文学と考古学の連携を探って
Author(s)	渡邊, 正人
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24-No.1, 2014.9 : 14-16
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5164
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

古代文学と考古学の連携を探って

渡邊 正人

私の専門としている古代文学の世界は、いくつもの研究分野が複合している状況である。文学・歴史学・考古学・民俗学・宗教学・人類学など、多くの領域によって多角的に解明しようというのであるが、実際はやはり、各専門分野が独立傾向は強い。方法論や実証方法などの相違が、安易に相乗りしてゆくことを難しくしているのが実際のところである。うまく成果を利用できることもあるが、また、そうでないことも多い。

たとえば、私は考古学も一応は専門範囲としているが、考古学の基本にある土器の編年に代表される形式学的な視点は、単純に文学の世界とはつながらない。

ちなみに、「土器の編年」とは、考古学のもっとも基本的なものである。博物館などに展示してあるような土器は、自由に勝手に作られるものではなく、ある時代に、ある地域の中では、ある規範に従って作られる。いわば流行のようなもので、ダイナミックな文様が好まれる時代と地域もあれば、縄文で精緻な文様が描かれる時代と地域もある。つまり、土器にとって文様を含んだ形式というものは、同時代の共通する文化の範囲の中で継承され、変化してゆくものなのだ。考古学では、それらを様々な要素に従って丹念に分類し、時代順に並べるのだが、それを「編年」と呼ぶ。今の時代でいえば、自動車の変化、というのが分かりやすいかもしれない。古くはフォード型の量産車が走っていた時代があり、そうしたフォード型の自動車が写真にでも写っていたらそれは1900年代の初めころの時代だと想定できる。また、ハイブリッド型の自動車が写っていれば、それは2000年前後と推定できる（トヨタから初めての量産型のハイブリット車が販売されたのが1997年）。このように自動車のモデルチェンジのように、土器もモデルチェンジをしながら、それでも「土器」とし

て継続的に使用され続けてきているのである。すなわち土器には、年代定位の役割と共に、同じ文様が好まれるという文化の共通範囲や、文様の影響関係からは人の移動や接触などの痕跡も反映しているので、当時の社会の内実も追うことができるものとして考古学では利用されるのである。だから、考古学では、基本的には土器が分からないとはじまらない、ということが言われる。

このように、実は土器のもつ情報量は豊富であるが、モノはモノであって、何も語るわけではない。そういった意味で、考古学の限界とは、われわれが目にするのは遺跡や遺物という結果であって、その現場や使用状況などについては能弁ではない、ということである。さらには、土器は腐らないから残るが、木製品や植物、動物の毛皮その他、有機物は長い年月の中で腐ってしまえば残らない。運よく残されたとしても、それはほんの一部である。つまり、われわれは考古学によって過去の生活や行為、歴史の全部を知ることはできないのだ。

とはいえ、考古学の発掘のニュースが、しばしば世間を驚かせるように、当時の状況がそのまま我々の目の前に現れ出てくることの意義は大きい。

いくつかの限界は自覚しつつ、考古学による古代世界の復元が、最近ではようやく進み、多くの知見が得られるようになってきているのだが、こうした方法論の違いなどから、まだ十分に考古学・歴史学・文学といった領域が手を携え、多角的に事象を解明してゆく、という段階にはなかなか至っていない。前置きが長くなったが、ここに現在の私の研究テーマがある。

目下のところの私の関心は、こうした考古学の解明してきた古代世界の実像と、前後して書かれた古事記・日本書紀といった文献に描かれた世界

との相違を点検することによって、当時の歴史意識や文学意識がどのようなものであったかを知りたい、ということである。古事記が書かれたのが712年、日本書紀が720年なので、8世紀の前半ということになるが、そうなると古事記や日本書紀が資料としたもの、経験してきたものは、古墳時代から律令国家の成立期までの範囲だろう。今、古墳時代は3世紀半ばから7世紀後半ごろまでを指すことが一般的なので、当時の口承伝承のありかたを考えても、まずは弥生時代まで明確に下るものは少なく、ほぼ古墳時代から、と大ざっぱに想定しておいて間違いはあるまい。

しかし、これではあまりに範囲も広いので、現在のところでは主として古墳時代後期から終末期、そして9世紀くらいまでの東国の動きを追いかけて、その実像と古事記・日本書紀・常陸国風土記・万葉集などに表れる東国の表現との関係を探ろうとしている¹⁾。

少し、具体的な事例から考えてみる。たとえば、常陸国風土記では、常陸の国のことを「古の人、常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは此の地ならむか」とほめたたえている。「常世の国」とは、当時の理想郷としてのイメージを持つ語で、たしかにこの文の直前には「いはゆる水陸の府臈、物産の膏腴なるところなり」とあり、理想郷のイメージは、明確である。しかし、この「常世の国」のすぐ後には、続けて「但、有らゆる水田、上は少なく、中は多きをもちて、年、霖雨に遇はば、即ち、苗子の登らざる嘆を聞き、歳、亢陽に逢はば、唯、穀實の豊稔なる歎を見む」とあり、現実的な状況も反映している。問題はこの後半の部分で、実際、当時の状況はこのようなものではなかったか、と思われる。日本の農業技術は、稲作の導入以降、灌漑技術の活用など、国土開発に寄与しつつ発達してきているのだが、それでも大規模な農地開発などが可能なほどには発達していなかった。古代での農地の大規模開発というと、条里制の導入な

どが思い浮かぶが、最近の考古学の成果でみると、条里制の始まりは743年の墾田永年私財法の施行が契機だとされているので、721年に成立した常陸国風土記のころには、まだ、小規模な開発に留まっていた可能性が高い。常陸国風土記の中でも、谷戸地の開発と見られる記事も多いからである。

このように自国を「常世の国」と自己認識する箇所は他にもあり、風景の良さ、水の良さ、産物の豊かなこと、といった美点を常陸国風土記特有の美文体で強調しているのだが、その陰には、現実の厳しさが見え隠れする。こうした自己認識の在り方は、いったいどのような経緯から生じたものだろうか？ 従来では、これを編纂に関わった中央官人たちの文学的修飾だとする考えが多いが、これを考古学的な実態からみるとどうなるのだろうか？ もし、背景に何もないとすれば、完全な机上の創作ということとなるが、何かしらの事実を反映しているとなれば、文学的修飾としての意識が見て取れる。風土記という地誌であるかぎり、虚構の部分をとれほど許容しつつ形成されたか、その編纂意識がわかるはずである。

常陸国を「常世の国」とする思想的背景には道教の思想がある。古事記や日本書紀にも、道教的思想は反映されている。地方においても、律令制の浸透に従い、さまざまな形で見ることができる。たとえば「急急如律令」といった文言、墨書土器や人面土器に見られる祭祀の姿、祓いの木製の人型などである。これらは、量に多寡はあるもののほぼ全国にわたって見られる現象であり、東国においても例外ではない。その中でも注目したいのが、八角形古墳である。畿内では天武持統陵とされる野口王墓古墳が有名だが、現段階で全国では20か所確認されている。そのうち10か所が近畿と近畿以西にあり、10か所が東国にある。群馬県と埼玉県に3か所ずつ、東京、山梨、栃木に1か所ずつ、そして茨城にも1か所である。いずれも6世紀末葉から8世紀初頭までの時期であ

る²⁾。

この八角形墳については、仏教や儒教、中国の政治思想、道教などの影響が指摘されてきているが、現段階では中国の政治思想、道教の影響をみる説が有力である。また、畿内における八角形墳の意味合いと、地方での意味合いは異なることを指摘する脇坂氏の説もある³⁾。

茨城県の八角形墳は、水戸市にある吉田古墳がそれで、築造はだいたい7世紀中葉とされている。調査報告書によれば、2006年から2007年にかけての調査で、墳形が八角形と確認された⁴⁾。先の脇坂氏によれば、地方の八角形墳は「それぞれの地域の政治的・社会的事情の中で成立してきたもの」とされるから、単純に道教的な思想背景を想定してしまうのには躊躇を覚えるものの、この古墳の被葬者は在地首長と想定できるというから、後の風土記の自己認識が生じるためには、重要なカギを握っているであろう。

また、この常陸国には今の霞ヶ浦となる香取海が古代には大きく存在しており、大きな影響を与えていたことが知られている。この香取海の南側の下総国ではあるが、墨書土器に記された願文などから、道教系の祭祀がさかんにおこなわれていたことが分かっている⁵⁾。香取海では、古くから水上交通で結ばれた文化圏が形成されており、下総から常陸の国にかけては文化の共通性も多くみられるので、常陸国ではそれほど顕著ではないにせよ、東海道の街道筋であり、香取海文化圏の内部でもあるので、こうした道教系の基盤の共通性も想定可能だろう。

さて、このようにして古代の現実世界において、道教の盛んな地として、下総から常陸一帯はあったのだと考えられる。この特徴は、多かれ少なかれ全国的な展開はしていたのだが、香取海を中心としたこの一帯では、特に色濃かった様子がその他の遺物なども含めて検証できる。これが「常世の国」の住民としての自己認識を育てる基盤になっ

たのではないだろうか。とはいえ、関連する遺物が多いからと言って、単純にはいかず、まだまだ、遺跡・遺物の検証や、その他の宗教的な痕跡、風土記の本文などを分析しないといけないのだが、現在、この仮説に基づき研究を進めている次第である。

注

- 1) これについてはすでに拙稿「古事記編纂と東国」『國學院雑誌』第112巻11号 2011 年でも触れている。
- 2) 水戸市教育委員会『吉田古墳Ⅱ』水戸市埋蔵文化財調査報告第10集 2007年による
- 3) 脇坂光彦「八角形墳」『季刊考古学』第40号（特集：古墳の形の謎を解く）雄山閣 1992年
- 4) 水戸市教育委員会『吉田古墳Ⅱ』水戸市埋蔵文化財調査報告第10集 2007年
- 5) その一端は、たとえば公益財団法人印旛郡市文化財センターで行われている発掘調査の報告会などでうかがい知ることができる。この池ノ下遺跡では、8世紀後葉の住居址から願文を記した墨書土器や炭化した桃の種が出土している。

<http://www.inba.or.jp/happyo/happyoindex.html>

(わたなべ・まさと 聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授)